

150 m<sup>2</sup> (1 講座についての面積) × 3 + 100 m<sup>2</sup> (実験講座であるための加算面積) × 3 + 150 m<sup>2</sup> (文部省基準による1学科についての面積) × 5 (学部内の学科数) ×  $\frac{3}{32}$  (文部省設置基準5学科に対し、学部内では實際上9学科の扱いをしているので、学科配分の面積を学部内全講座数に按分して各科の割当に加えたもの) = 820 m<sup>2</sup>。これから共通部分(廊下、トイレ等の分)として一率に3割(246 m<sup>2</sup>)引き、さらに共通講義室(全学部で講義室を6室設け、3階のフロアに集めた)分への供出として100 m<sup>2</sup>をひいて、474 m<sup>2</sup>が地理学科の部屋として使える割当。最終決定によると、教官研究室4、実験室3、計測室1、製図室1、図書室1、準備助手室1、演習室1、家生控室1を設け、計450 m<sup>2</sup>(実験講座からなる地理は、教育・体育に次いで総面積が大きい方なので、修正のさいに基準より24 m<sup>2</sup>減となった)ちなみに現在の地理学科は、学部内でも広い領地をもっているといわれるが、講義室を除くと390 m<sup>2</sup>である。(最近加えた2階の標本室とも)。

紙面の割当をすでに超過しているので詳細に記すことができないのは残念である。今年秋頃には南門の前に8階建の鉄骨が組上がると思うが、現物をごらんに入れる段階で、また説明をする機会をもちたい。

いま完工後について心配をしていることは、各部屋の配置は果して適切であったか、南面の部屋は騒音と風塵になやまされるのではないか、机や書棚は当分現在のものでも間に合うことになりはしないか、学生控室の適切な利用がなされるだろうか、非常の場合の対策は万全か、等々である。とかく物事は上首尾にいてもともとで、失敗があれば責任を負わされることになっている。いまもひびいてくるくい打ちの音を聞きながら、部厚い現場の設計図を前にして、予想外のミスをふくんでいるかもしれない新校舎の完成像を頭に描く。

## マイソールのエキスカージョン

式 正 英

もう2年も前のことになるが、南インドの旅の一駒を紹介することにしよう。マイソールはマイソール州の旧都で藩王の荘麗な宮殿があり、マイソール大学もある。「デカン半島の地形発達史」と「計量地理学」の2つのシンポジウムがこの大学の地理学教室で開催された。ゆるやかな起伏に

赤褐色土が点々と露出する緑の芝草の広いキャンパスの一隅に、二階建ての地理学教室が独立してある。上下で合計15室位の建物であり、この中で同時に2つの国際シンポジウムが開けるのだから、少くとも本教室の2倍の規模は持っていることになる。主任は合衆国メリーランド大学で助手をしていたミスラ教授で、1930年生れの気鋭の学者である。

地形のシンポジウムは始めバンガロール大学で開かれる筈であったが、グラデュエート・コースを持たない同大学ではお荷物になったためか、設備の整ったマイソール大学に会場が移された。あとで考えるとミスラ氏は大御所チャタジー氏（I.G.U.会長）のナショナル・アトラス機関にも在籍したことがあるので、同氏の尻押しがあったかも知れない。いずれにしろマイソールで過ごす間に、マイソール大学の関係者や出席した東西各国人と親しくなることができた。所詮、国際学会はシンポジウム出席に意義があるとつくづく思う。

12月11日、シンポジウムの講演の方はなるべく早々にくりあげて、郊外のエキスカーションに出かけようと地形学の泰斗ルイ教授（西ドイツ）の提案に皆賛成し、乗用車を借り集めて出発することになった。チャムンディ丘は街の南にある比高200mほどの丘陵である。丘頂の一角には山頂集落があり、ヒンズー教の巨大な怪奇な塔が聳えている。半乾燥気候であり、花崗片麻岩から成ることもあって丘陵は谷の発達に乏しく、胴体山地ともいえる老年山形を呈している。その麓部には5-6度に緩傾斜したペディメント（岩石扇状地）が付着している。ペディメントの地先は、うねうねと広がる小起伏の結晶片岩から成る準平原に推移している。70才のルイ教授は母国から持参したハンマー片手に、講の中や井底をのぞいて風化層の深さや基盤の位置を確かめに飛び歩き実に熱心である。

つまりこのペディメントは残丘と隆起準平原面との接合部にあり、残丘斜面はペディメントとは不連続的に急にそり立っている。残丘斜面から流出する河谷はないのだから、総体にうける陸上削剝作用によって、次第に残丘斜面が後退し、その跡にペディメントが遺されるのであろう。云うなれば地層階段のエスブラネードの形成にも似た洗食のメカニズムが考え易い。さう云えばデリーの会場でチェッコのデメク氏等によって、ペディメント形成作用についてしきりに論ぜられていた。隆起準平原を形成したペネブラネーションに対して、ペディブラネーションは現在進行中であり、相対的に新しい営力な訳である。

12月12日、午前9時ホテルにバスが迎えに来る。今日のエキスカーションは賑やかで陽気なインドの先生達や学生が多数同行する。隆起準平原を下流側から刻んできた回春谷に懸る壮大なシヴァサンドラムの滝まで行く約200km、1日かかりの道程である。準平原上に広がる収獲期の水田や赤土の畑にたつ瘦せた桑の樹など、沿道の興趣も日本と比べて尽きないものがある。静かな死

んだ様な農村のタルカッドに着く。

この村落の背後にはコウベリ川の右岸から移動してきた河畔砂丘が迫っている。コウベリ川の水源地は西ガーツ山脈の比較的雨量の豊富な場所にあるため、半乾燥地域を流れる川としては流量は大きい。しかし隆起準平原上を流れるのだから、河畔の沖積地の巾は狭く限られている。しかしタルカッドの砂丘は高さが20〜30mもあり、その占める面積もかなり大きいので驚きである。砂丘は花崗岩質の白い細砂から成り、砂丘表面は薄いがもはや赤褐色に酸化されている。砂丘は川の右岸すなわちこゝでは東側だけにみられる。その形成原因をめぐってカレッジ講師のケンパナ氏とペール氏が侃々諤々の議論を始めた。片や南西モンスンの影響だと云い、片や河道が西に移動して旧河道が東に遺された所為だと云う。双方の原因とも両立すると思うのだが、互いに自説を守ってゆずる様子はなかった。

砂丘の頂陵から西に少し降った所に、12世紀の右造のヒンズー教寺院が砂に埋もれている。14〜15世紀に自然に埋まり、現在は掘りおこされて建物の上半部が顔を出している。中央アジアのロブノール付近の砂丘に埋もれた樓閣の廢趾もかくやと想いをめぐらす程に印象的な風景である。砂丘はその後安定して低木や高木がまばらに生えている。その内の一つ、肉厚の広い葉のむらがる蔭に、例の三日月型の独特の莢をみつけた。カシューナッツが砂丘に生える植物の実であることをこの時始めて知った。

## イスタンブールとユスキュダル

正井泰夫

1970年4月初旬、ヨーロッパへの旅の途中、イスタンブールとユスキュダル(ウスクダラ)に立ち寄った。「アジアへの門戸」を見なかったからである。

テヘランから飛行機でアナトリアの上空を飛ぶと、まだ雪をいただいた高山が、赤茶けた大地の中に聳えているのが見える。赤い屋根の多いイスタンブールに近づくと、風景は地中海式に変わる。イスタンブールの空港は、テヘランの悠々として尊大な感じとは違って、地中海の華やいだ雰囲気一杯であった。

着いてすぐ、ボスポラス海峡を渡ってユスキュダルへ。20人乗りの小型船で渡ったのだが、行先がÜsküdarと書いてあったので、「ユスキュダル？」と聞いて、とび乗ったのである。